

現代
全集

35

現代戲曲名作集



現代戲曲名作集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

昭和四年十月八日印刷
昭和四年十月十日發行

現代日本文學全集 第三十五篇

著者代表 中村吉藏

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替東京八
電話芝(43)
四三二一〇
番番番番番



森内山小(6) 野吉村中(5) 郎太鬼岡(4) 翁松居松(3) 麻櫻地福(2) 彌阿雙竹河(1)
 郎三泉木鈴(12) 雀雨田秋(11) 勇井言(10) 雄秀田長(9) 郎太奎下木(8) 伍大田池(7)

影照家諸

「現代戯曲名作集」目次

卷頭 寫眞 (曙影家)

序 二

河竹默阿彌篇

天衣紛上野初花 (河内山と直傳)

福地櫻癡篇

春日局賢女龜鑑

松居松翁篇

阪崎出羽守

岡鬼太郎篇

眠駱駝物語

埴生村

中村吉藏篇

井伊大老の死

小山内薫篇

第一の世

三三

息子 三四六

吉利支丹信長 三五三

池田大伍篇

茨木屋幸齋 三六四

蝶 三八八

木下空太郎篇

和泉屋染物店 三九〇

長田秀雄篇

飢渴 四〇六

吉井勇篇

俳諧亭句樂の死 四三四

小しんと焉馬 四四八

秋田雨雀篇

國境の夜 四六二

手投彈 四七四

鈴木泉三郎篇

生きてゐる小平次 四八六

劇壇諸家略年譜

四九九

序

詩と舞踊とが、原始人類の存在とともに發生し、これが演劇に變形して行つた。視覺と聽覺から、直接に人間の感情に入つて行く藝術だからである。どの國でも、演劇は、小説に先行して居た。小説は、文字を媒介として、頭腦で味つて行く藝術である。文字の知識が民衆に行き互つた時代でなければ、小説は一般の好みにならない。

日本はどうした加減であつたか、小説が相當古い時代から發達した反對に、演劇は一向芽が出なかつた。演劇らしい演劇が日本に現はれたのは、何と云つても徳川期の半ばからである。讀む演劇である戯曲も、その頃から優秀なものが出て來た。さて徳川期が終つて、明治の初期に生きた河竹默阿彌は、何にしても素晴らしい存在である。彼のどの戯曲にも、勸善懲惡主義が盛つてあるといつても、それぐらゐは、彼の生きた環境から見て同情してやらねばならぬ。人物の組み合せが小面僧いほど手に入つて、舞臺の上の活躍に五分の隙もない。思ひも掛けぬ清新な題材を、無造作に掘み出して來

る、莫大もない創造力の豊富と、老練きはまつた彼の劇的技巧は、前後の歴史に例のない世話物の世界を切りひらいた。その默阿彌から、大正末期の奇才、鈴木泉三郎まで、ここに、近代日本の戯曲界の、一列の體系がある。それはまた、明治から大正末期に亙る戯曲文壇の明確な見取圖でもあり、その時代を貫く、戯曲の思想、傾向、技巧の推移を語る文學史的報告でもある。この一つ一つの戯曲を讀んで來て、何が強く心を撰つたかとならば、日本の他の文化の歩度のそのやうに、近代戯曲の進展のテンポの、恐ろしく加速度であつたことである。前にも述べたやうに、日本の演劇——戯曲の進歩史は、小説と比べものにならぬほど後れて居た。それがけふ日では、小説にちつとも引け目を感じぬほどに、藝術的に生長したのである。それを驚くべき奇蹟と云つたら、大して間違つて居るだらうか。

この戯曲集から受けるもう一つの印象は、ここに集成された限りの作物が、個々の作家の個性と、傾向と、背景とを通じて、明治大正文藝のあらゆるイズムの流れを、時間的に展開した風景である。ドイツの徹底自然主義を酌んだ

らしい、「スバル」の一群がそこに居る。唯美派と、癡癡演を、適度に自然主義に加味して、それを精妙な舞臺技巧で表現した自由劇場の新人層がそこに居る。自我の權威を凡俗の上に築き上げて、個人の勝利を高らかに謳ふイブセンの使徒達がある。地底にとよまず新興階級の呻きに耳を傾けて、しみじみと社會危機を思ふ虛無の詩人がそこに居る。新しい眼で、眺めた時代背景の上に、歴史の巨人を、人間として再吟味する新現實主義者もあれば、默阿彌に、明治大正の新装をさせようとする老練な舊劇の知識者もある。その他、等々。默阿彌時代の作劇術は、芝居道の傳統と、體驗と、自己の物さしに依頼する外なかつたものが、新人は、新時代は、主知的であり、嚴肅なドラマトルギイの、科學的法則によつて製作するまでに生長した。

當來の世界は、文字を通して頭腦で味ふ小説時代を葬り、視覺と聽覺に依頼する藝術——映畫、演劇の時代に進出しようとする。この戯曲集は、その新時代の途を新日本に拓いた記念碑としても不朽の意義がある。

昭和四年九月

天衣くもに紛まがふ上うへ野の初はつ花はな

(河内山と直侍Ⅱ六幕)

河
竹

默
阿
彌

御定連より御好みに伯圓氏の得意の讀物てうど時候も吉原に是て二度目の裏駒染其三千歳に市之丞が嫌れて歸る堤の稻妻初雷かごろつきの黒閑丑が喧嘩買花に嵐のお藤が難儀を清兵衛からの頼みにより乗込む使僧の綱代駕籠三衣は着て宗俊と松江の殿が目覺えの類の黒子に大勝が見出す街を見恥すは心高木が學びの力以前は素讀の指南せし寺田も今は漸と命毛繁ぐ華職人貧に迫りて拾ひし鯛に妻や伴に言譯も涙に濕る門口へ身を捨てて行く半七が危急を救ふ直侍東左衛門が影富を突當て取る二百兩夫が小判の耳になり許議厳しく喜兵衛が情に惜む名残の水放れ跡を濁さぬ鳥日の金子が身請によるこぶ藤五郎素性を問へば同胞のちなみをむすぶ河内山覺悟の細目に片岡が悪行つもる雪の捕物

添植樹新再木古

天衣錦上野初花

(河内山と直侍)

六幕

序幕

湯島天神境内の場
長者町上州屋の場

〔役名〕
河内山宗俊、金子市之丞、くらやみの丑松、上州屋番頭傳右衛門、元木彌九郎、大塚伊四藏、富の札賣七兵衛、神主左司馬、和泉屋清兵衛、手代當助、幸

兵衛女房お元、上州屋後家おまき、同下女おしげ、茶屋娘おせん、丁稚長松、(其他)

(湯島天神境内の場) 本舞臺一面の平舞臺、眞中奥深に石の大鳥居、この左右石の獅子、同じく奉經の燈籠、この後一面本社より横に松金屋の入口、其の外を見たる書

割の張物、上方斜に竹矢來の小屋、是れへ定紋附の幕を張り、此の前に大戸の出這入り、天満宮奉經劍術試合催主金子市之丞と記したる建札を立てあり、下の方屋根附の水茶屋、奥の方一間の腰掛、後誂への聯をかけ、此の外銅の銅壺茶道具など飾り、御意所といふ掛行燈、軒提灯をかけ、舞臺よき所へ床几二三脚並べ、日覆より松の釣枝、總て湯島天神境内の體。爰に七兵衛やし装、富の札賣にてをり、○△□の四人何れも床几へかり居る、おせん前垂掛け茶屋娘にて皆々へ茶を出して居る。此の見得よろしく、大拍子にて幕明く。

せん 皆さん、お茶を一つお上りなされませ。
七兵衛 今日湯島天神境内の場、此の天神様へ奉納の、劍術の試合があるので、此の御社内は思はぬ群集、こつちもお蔭で富の札を大層に賣りました。

○ その堀田原の先生といふのは、當時江戸で名人だと噂の高い劍術遣ひ、この建札にもある通り、金子市之丞といふお人。
△ 男も好いが氣合もよく、淺草切つての好い

顔だが、侍の癖に喧嘩早く達者な腕であばれるから、何處でもおどげを震ふさうだ。

□ その先生が試合と聞いては、おら達もどうか見物したいものだが、さうしてやつぱり角力のやうに、木戸銭を取つて見せるのかな。

◎ それとも先きが侍だけ、町人のものは取らぬといつて、たゞなら減法安いものだが、もし如さん、幾らぐらゐで見られるだらうな。

せん そりやもう奉納の試合ゆゑ、幾らといつて木戸銭を、お取んなさるのではござりませんから、ほんの思召しでようござりませう。

七兵 極つた木戸を取らぬ替り、四人で一人前小二朱づつはずめば、御の字でございませう。

○ 百疋位で先生の、試合が見物出来るなら安いものだ。

△ 一人前天窓割りに、小二朱づつ集めて行かう。

□ これさ、さう現金に取らなくつてもよいぢやあないか。

◎ そんなら如さん、試合場へちよつと案内して下さい。(ト立ちかゝるを、七兵衛留めて、)

七兵 あゝもし、其の劍術のけんといくを視

つて、どうか當の札を一枚宛お買ひなすつて下さいまし、もう突日は近々ゆゑ、今が札の買ひ時でございます。

○ 當の札なら買つてもよいが、此の前も五六度追日をして試したが、今年は何處も暗剣殺、

△ 吉方でないといふから、どうせおら達には當るめえ。

□ 然し直との相談だ。一枚幾らに負けなさる。

◎ 安けりやあ、溝の中へうつちやる氣で買つて見ませう。

七兵 それは有難うござります、一枚二朱と四百文でございますが、口銭なしに二百文お負け申して置ませう。

○ それぢやあ四枚貰ひませう。

七兵 それは有難うござります、當りさうなのを差上げます。

○ 如さん、これを帳場へあげて、棧敷へ案内して下さい。

せん はい、畏まりました。さあ皆さん、斯うおいでなされませ。

七兵 御ゆつくりと御見物下さいまし。(ト大拍子になり、仕出し四人おせん附いて上手木

戸の入口へ入る。) 今日金子先生のお店で大層人が出たので、こつちも思はずお相伴、もう百枚足らず札を賣つたが、どうか慾には千枚も賣つて、祝儀を貰ひたいものだ。

ト三味線入り大拍子になり、花道よりお元やつし装世話女房のこしらへて出来り、花道へ留り、

もと 今日臨時のお神樂でも天神様にあるかして、常より大層賑かだが、長者町のお袋さまもお参りにお出でなされたと思える、お宮にお出でなされまするか、お目に掛りたいものぢやわいな。

ト本舞臺へ来る、此の時上手よりおまき大家の後家のこしらへ、おしげ下女のこしらへにて附添ひ、丁稚風呂敷包みを背負ひ出来るをお元見て、

これは長者町のお袋さま、只今お歸りでござりますか。

まき 思ひ掛けないそなたはお元、今日は何處へ行つたのぢや。

しげ お前さんも天神さまへお参りでござりすか。

もと いえ、さうではござりませぬ、久しく上りませぬゆゑ只今お店へ上りましたら、天

神さまへお参りにお出でなされたと承はり、お跡を慕うて参りましたわいな。

新之 お跡を慕うてお出でとは、おつかさんは

お袋さまに、何ぞ用でもあるのかえ。

もとお袋さまに伺ひたいことがあつて、來たのぢやわいな。

まき 何は兎もあれ爰は往來、茶屋でゆつくりと話ませう。

もと 左様なら、お供をいたしませうわいな。

(ト右の鳴物にて皆々床几へかゝる。)

せん もうお歸りでござりましたか、今日はお早うござりましたな。

まき お百度も段々慣れ、早かつたかも知れぬわいの。(ト兩人床几へ腰をかける、お元思入あつて、)

もと この間からお見舞に上りませうと存じましたが、何とやら暇なしで御無沙汰になりましたが、承はりますればお屋敷からお嬢さまのお暇が出ませぬと申すこと、嘸御心配でござりませうな。

まき よう尋ねて下すつた、ひよんな所へ御奉公に上げたがこつちの災難、今更いふも愚癡ながらお元どの、まあ聞いて下さんせ。(ト合方になり) 丁度娘が十四の春、あるお人が

お世話にて松江様へお小姓奉公、お高といひ御有福なお暮しゆゑに何一つ申し分はなけれども、どうしたことやら殿様が外に女子のないうらに娘をきつい御執心、是非お妾にしたいというて表向きのお掛合、下ざま育ちの娘が身では有難いとも勿體ないとも、心で思へど知つての通り、去年連合が死なれてより後家を立てぬくわしが心配、後にも先にもたゞ一人力と頼むは娘のおふぢ、もう年頃ゆゑお暇を願つて早う嫁を取り、家督を讀つて初孫の顔が見たいと殿様の、御意に背いてお暇を願うたなれどもお許しなく、其の上ならず此の頃は一間とやらへ娘を押籠め、文さへ宿へ遣つてはならぬと殿様よりのおつしやり附けと、聞いてびつくり二三日は、三度の食さへ喉へ通らず、毎日泣いて居ますわいなう。

もと そのお話しも此の間御後見の清兵衛様から承はつてござりますが、何をいふにもお大名、多くの人の手を経ねばお暇願ひもついでそれとお許しにはならぬとのこと、御恩になつたお店の御難儀、どうか工風はあるまいかと心配いたして居りますが、御存じの通り連合の幸兵衛どのは去年からぶら／＼病で

床につき、歩行が心に任せぬゆゑ、今日はせめて御見舞に上つて、御様子を伺ひ来いと申しますゆゑ、お跡を慕ひ爰まで参りましたけれど、すりやあのやつばりお嬢さまの、まだお暇は出ませぬかいなあ。

まき それに附けても氣にかゝるは、二三日あといに朋輩の宿へ届いた文の内へ、おふぢの文を封じてあつたをその家から内々で、届けてくれた其の文の様子で猶々苦勞の増したは、日頃意地の悪いといふお年寄の岩崎どのが、是非殿様のお心に随はせると娘に迫り、打ち打擲こそなさらぬけれど、否といふなら一生涯宿へ下げぬとおつしやつて、晝夜お勧めなさるよし、只さへ内氣な娘ゆゑこんな辛い目に遭ふより、いつそ死んだがましであらうと、ひよんなことでもしはせぬかと、それが一倍苦勞になり、夜の日も睡らず泣き明かし、心配して居ますわいなあ。

しげ ほんにお側でお袋さまの御心配をばなさるのを、見聞きするさへおいとしようて泣いてばつかり居りますが、先きは名におお大名こつちは町家のことゆゑに、たゞ此の上は神様の御利益願ふ外はないと、お袋さまをお勧め申し、七日の間この湯島の天神様へお百

度を、あげて願うて居りますが、それさへ今日が七日の満願、

新之 天神様のお恵みがなければ頼みの綱も切れ、御心配をなされますゆゑ、お袋さまにはこれが元でお煩ひでもなされませぬかと、おつかさん、わたしも苦勞でなりませぬ。

まき およく言やつた新之助、外に小僧も多くあれど主人と思へば大切に、優しいそなたが今の詞、

しげ ほんに外の小僧どんは暇さへあれば遊ぶのに、影陽なくお袋さまを大事になさんす新之助どの、

まき 人は氏より育ちとやら、是れといふもお前の丹精。お元どの、お前に禮を言ひますぞいなう。

トよろしく思入、お元もこなしあつて、

もと あゝこれ勿體ないことおつしやりますな、朋輩衆に立勝り御奉公をば大切に、せねばならぬは當り前、私どもが身の上を、まだおしげさんには御存じはござんすまいが、重なる御恩のあらましを、まあ聞いて下さるいなあ。(ト合方になり、)元私の親といふは小梅村の植木屋にて、親父がお店へお出入

りゆゑ、しかもわたしが十四の年、お小間使ひに上つてから丁度足掛け五年越し、御恩になつた其の上に、十八の年にお袋さまが眼鏡にて、今の夫幸兵衛どのが御地面内に居たのを、丁度似合の年頃と縁附けて下さつたが、間もなく夫婦のその中へこの新之助を儲けまして、假初ながら十餘年、世帯を張つて指いでも段々續く不仕合せに、餘儀なく場末の橋場へ引込み、微々暮しの筆職人、以前わたしが勤めたる御縁つなぎで九つから、又新之助をお願ひ申し親子二代の御主人様、厚いお世話になりましたれば、人に勝つた忠義を盡し、お袋さまを大切にせねば罰が當りますわいなあ。

まき ほんにそなた衆夫婦の者が、これ程までに實直な善い心がけて居なさんに、幸兵衛どのが病氣ゆゑ、はかばかしい排きもならず、それゆゑ今では橋場にて兎角難儀を。

もと え、

まき いえさ、難儀といつたは病氣のこと。(ト兩人よろしく、新之助思入あつて、)

新之 もしお袋さま、今朝お迎ひに上りました御親類方が、もうお家へお出でなされたでござりませう。

しげ ほんにお前の言ふ通り、御後見の和泉屋様が、嘸も待兼ねてござりませう。

まき 娘の事で相談せうと、親類中へ迎ひを出せば、少しも早く歸りませう。

新之 おつかさんはこれから直に、橋場へお歸りなされますか。

もと いや、お袋さまをお家までお送り申しませうわいな。

まき おゝ、まだ話したいこともあれば、家へ一緒に来てくりやいの。

せん もうお歸りでございますか。

しげ おせんさん、お茶代を爰へ置きます。

せん はい、有難うござります。

もと 左様なればお袋さま。

まき お元も一緒に。

もと どれ、お送り申しませうか。

ト唄になり、おまき先にお元、新之助、おしげ附いて花道へはひる、此の時後より以前の七兵衛出来り、

七兵衛 今行つた後家様は、長者町の質屋のお内儀、家の娘で心配筋とはどんなことかおせん坊、お前知つて居るか。

せん 委しい事は知りませんが、あすこの家のお嬢さんが松江様へお小姓に上つた所、殿

様のお目に止つて、是非お妾にしたいといふので、大層親御さんが氣を揉んでおいでなさいます。

七兵 さういふ口ならこちと等は二つ返事で悦ぶが、工面の好い衆は、とんだことを心配するものだ。

せん それはさうと七兵衛さん、今日金子様の試合場へ、札賣中で三兩上げると、今さう言つて來ましたぞえ。

七兵 三兩とは大はずみだ、其の上山の茶屋と矢場で五兩上げるといふことから、定めて大層寄ることだらう、あゝ氣の悪い話した。

ト大拍子になり、此の内上手大戸の内にて、大勢にて喧嘩々々とわや／＼言ふ、ばた／＼にて木戸の内より、黒闇の丑松三尺傳法のこしらへにて、出來るを、達附衆の世話役二人是れを宥めて出る、此の後より試合装の門弟四人

好みの髪後鉢巻、袴、稽古着、竹具足装にて竹刀を持ち出來り、丑松へ掛るを、世話役雙方を留め、

世一 あゝこれ、靜かになさいまし、相手は高が町人ゆゑ、まあ／＼放しておやんなせえ。

同二 これ、若え兄イも、おとなしくして靜か

に見物して行くがいゝ、野暮なことは言はねえで、

同 一 わし等に任せて、
兩人 下さいまし／＼。(ト留めるを丑松振拂ひ、)

丑松 うつちやつて置いてくんねえ、見て悪いならこんなものを、誰が嫌しがつて見るものか、出るといふから出たが悪い。

門一 いや悪いとは申さぬが、今日金子先生が、天満宮へ奉納の、

同二 藝道磨くこの試合を、見世物同様手前達に、悪口言はるゝ謂れはない。

同三 わいら如きにけちを附けられ、此の儘にして歸しては、

同四 先生の御恥辱ゆゑ、今一言申して見よ、日頃の手前我々が、

同 一 一本參るぞ。
四人 覺悟いたせ。(ト立ちかゝるを丑松こなしあつて、)

丑松 おゝ打つたら擦手に打つて見る、所の者へ渡りも附けず、花會同様小屋をかけ、人寄せをしやあがるから、それで言分附けに來たのだ。

門一 又しても劍術を、花會などとは無禮の

一言、
同二 神へ奉納いたすのを、師匠が私慾か何ぞのやうに、

同三 言分附けに參つたとは、いよく以て奇怪至極、

同四 師匠に代り我々が、其の舌の根を、
四人 抜いてくれん。(ト立ちかゝるを、丑松尻目に掛け、)

丑松 えゝ、しやらくせえ、靜にしるゝ、うぬ等のやうなびい／＼を相手にしては此方の名折だ、喧嘩をするなら小屋の主人、金子とやらに

門一 出ると言へ、うぬ等は黙つて見物しろ。
門一 やあ、人も無げなるその雑言、もう了簡

四人 相成らぬ。(ト四人竹刀にて打つてかゝる、此時上手木戸の内にて、)

伊彌四九 あいや何れも、暫く待つた。
門一 や、あのお聲は、
小先生、

伊彌四九 まあ／＼何れも、鎮りめされ。
ト誂への合方になり、木戸の内より彌九郎伊四藏くりさげ、髪大小袴稽古着

試合の装、門弟頭にて出來り、兩人床几へかゝる、丑松見て、

丑松 そんなら、こんたは、

彌九 いや、金子先生ならず、我々共は堀田原の、道場和かり大木彌九郎、

伊四 まった拙者は塾頭たる、大塚伊四蔵と申す者だが、此の場の様子はあれる小屋に

て、

彌九 逐一聞いて其の方が、住所姓名承はり度く、品によつたら相手にも、ならうと存じて何れもを、

伊四 お留め申して兩人が、先生の名代に、

そこへ面會、

兩人 いたしに參つた。

丑松 そんなら お前さん方が、門弟衆の頭分

か、わつちやア下谷山崎町の遊び人、黒闇の

丑松 といふけちな奴でござえます。

彌九 む、そんならそなたが丑松か。

伊四 して今日の試合をば、何で言分、

兩人 附けに參つた。

丑松 それは言はずと知れたこと、下谷切つて

此の湯島は、云はゞこちの細張内、なぜだんまりで小屋を掛け、花會じみた錢貰ひを、

渡りを附けずしなさるのだ。

兩人 何と申す。(ト聖天の入りし合方になり、)

丑松 堀田原の道場で金看板の劍術指南、表

は立派な堅氣だが其の内幕は内會仕、扶持方棒を捻つて脅す案山子の弓矢と違ひ、木偶の

坊でも湯島から下谷切つてはそれ、に、渡

りを附ける利道を、概に曲つて奉納の試合は

ほんのぼく、除けで、近所の矢場や水茶屋から

集めツこの錢金を貰やあ言はずと花會だ、

木戸は無錢で見物を入れても幾らか水引を掛けたものをなぞ貰つた、いはゞ見世物同様に

る、近所に遊ぶおら達へ何で渡りを附けねえ

のだ、形は小粒の兄イでも名は高島の親護

リ、うぬ等に割を喰やあしねえぞ。(トきつと

言ふ、彌九郎伊四蔵むつとして、)

彌九 こいつが、言はしておけば過言千萬、諸儀のうちでも上に立つ天下御免の劍道

試合、それを見世物同様に、何でわいらへ渡

りを附けうぞ。

伊四 殊に藝者屋料理屋を賣めて集めしなんぞ

とは、我々のみか先生までお名の汚れる其の詞、一錢たりとも此の方より、貰つた覺えは

かつつて無いぞ。

丑松 達て錢を集めぬと、云ふなら矢場や水茶屋から、贈つたものをなぞ返さぬ。

丑松 黙つて取りやあ花會だ、錢貰ひだから丑

松が言分を附けに來たのだ。

トきつと言ふを七兵衛、世話役よろし

く丑松を留めて、

七兵衛 これ、兄イ、お前のいふのももだが、

何を言ふにも堀田原で名高い先きは老先生、

爰で喧嘩をした日には、

世一 假令こつちに理があつても、

同二 七分の負けは武士と町人、

七兵衛 まあ簡してわし等に任せ、爰は綺麗に、

皆々 歸つて下せえ。

丑松 いや、厭だ、こつちも一旦言出したら金

輪際動きやあしねえ、それとも歸つてくれ

なら、しらちを附けて返して下せえ。(ト言ふ

を彌九郎、伊四蔵小癪なことを言ふ奴だとい

ふ思入あつて合方になり、)

彌九 高が相手は素町人と思つてこれまで勘

辨いたすに、言はして置けば好い氣になり、何

ぞといふと金錢を集むるやうに申しなせど、

其の方などが手拭や富士大山の神酒を配り、錢を集むる頼母子や湯治場行きの奉加帳、弱

伊四 しかも免許と筆太に大きく書いたあの建札、天満宮へ奉納の御術試合の此の催し、それはこつちも盛り場で人寄せをいたすゆゑ、金子氏より奉行所へ届けをなしていたしたこと、それともわいらへ渡りを附ければ、人を集むる催しが出来ぬといふお觸でも、あらばそつちが望み通り、

門一 渡りを附けて遣はさうが、
同二 武士の表の御術試合、
同三 わいら如きの下知を受け、
同四 何で催しいたさうぞ。
彌九 達て渡りの銭が欲しくば、金子氏の名代に、

伊四 我々共が取扱ひ、渡りをやるが其の代り、金は金だが、
門一 延鑑だぞ。(ト刀をぬき掛ける、丑松少し氣味の悪きこなしあつて、氣を替へ、)

丑松 何だ、何だといふと大小を捻り廻して脅しやあがるが、そんな煽りを喰つたツてびくともする丑松ぢやあねえ。さあ、切るなら綺麗に、さあ殺せ。

彌九 お、望みとあるなら、
門一 いでわれが。
皆々 ト皆々思入あつて刀を抜き、丑松の

目先へ突附ける、これにて丑松ぞつとせし思入、これを見兼ねて、七兵衛世話役雙方をあわてゝ留めて、

七兵衛 あ、これ、めつたなことをなされま

するな、此の御社内で切つ張つがあつてはお山の大難儀、これき兄い、何にも言はず了簡して、この儘歸つておくんなせえ。

世一 相手は不足なこつちは町人、刀の穢れになりますから、

同二 まあ、皆さんも、わしらに免じ堪忍なされて。

三人 下さりませ。(ト留めるを機に門弟皆々思入あつて、)

彌九 此の方とても多人數を、集會いたすこの催し、決して事は好まねど餘りといへば彼れが惡口、

伊四 人の難儀になる喧嘩、了簡いたして、皆々 遣はすぞ。

七兵衛 あれあの通りおつしやれば、兄いも爰は大負けに負けて、今日は、

三人 歸つてくだせえ。(ト留める、丑松も爰で切られては大死だといふ思入あつて、)

丑松 喧嘩は留めるが花だといふから、今日は一番町まされ、指を銜へて歸るとしよう。

彌九 そつちが歸らば我々として、血を見ぬ刀をその儘に、

伊四 社内を穢さず勘辨なし、元の鞘へ、門一 納めてやらう。

皆々 然し此の儘歸るとも、見掛けはけな小野郎でも一寸の蟲に五分の魂、きつとお禮に参ります。

彌九 お、其の念には決して及ばぬ、我が先生の邸宅は堀田原で名に高く、雷名轟く金子氏、いつ何時でも尋ねて参れ。

伊四 然しいくら大きなことを言つても、武士に出會つては町人風情の悲しさに、手出しもならず尻込みなし、此のまゝこそ歸るとは、

彌九 見れば見るほど、皆々 じじめなざまだ。

丑松 二本棒を相手ゆゑ、爰で命の遣り取りは七分の損と今日は歸るが、此の仕返しには度胸を据ゑ、こつちが死ぬかそつちを殺すか、生、死二つが別れの鐘、入相までに、

彌九 どうしたと、
丑松 きつと来るから待つて居る。

トきつと見得、聖天の入りし誂への合方になり、丑松無念を忍び花道へ逸

散にはひる。門弟皆々後を見送り、鼻柱の強い奴だが、我等を見てぶる／＼

顛へ、尻込みなして逃げて行くとは、口程でもない弱い奴だ。

伊四 これなる札賣七兵衛や、世話役二人が留めぬなら、もう今頃は彼奴が身體は、粉微塵になるところ、

門一 留めたを機にこそ／＼と、

同二 無念を忍んで歸つたは、

同三 よく／＼命は惜しいと見える。

同四 これに附けても先生の、

彌九 お腕前には向う見ずの、彼等も辟易、いたすに見える。(ト是れにて七兵衛世

話役も安心して)

七兵 いや、何しろ無難に済み、こんな目出度いことはないが、是れといふのも先生方に

恐れて兄イも行つたと見えるが、

世一 先きも名うての遊人、もしや再び仲間を集め、

同二 若し仕返しに來はせぬか、あゝ又それが、

三人 心配でござりまする。

彌九 いや／＼、口では仕返しに來るなどと申せども、何で再び手出しがならう、何は格別今日は思つたよりは大入にて、

伊四 勸進角方に劣らねば、此の悦びに先生

へおねだり申して二三日は、夫のお馴染の大

口樓で、何れも一杯やるといたさう、それに

つけても先生へ、

門四 今、喧嘩の納りを、

彌九 逐一お話し申したければ、世話役衆も一

緒に來やれ。

そんならお供をいたしませう。

然らば御兩所。

伊四 彌九 同道、(ト榜の座を拂ふを道具替りの知せ) 仕らう。

ト唄になり、皆々よろしく此の道具廻る。

(上州屋見世先の場)——本舞臺四間の間

常足の躰込み、上手一間障子屋體、軒に

山形に上の字の印の紺暖簾を掛け、正面

上の方一間中仕切間平戸の戸棚、この前に

帳場格子真中に暖簾口、下手一面の板羽目、

これに質物の帳面を掛けし書割り、いつも

の所門口、この外井筒の印の附きたる路地

口、下手黒塀、總て下谷長者町上州屋見

世先の體。帳場格子の内に傳右衛門着流し

前垂掛け番頭にて帳面を調べ居る、平舞臺より所に音助着流し前垂掛け、手代にて流れの質物を調べ居る、此の脇に丁稚長松入質を片脇へ積み上げ質札を讀上げて居る、此の模様角兵衛の鳴物にて道具留る。

長松 千三百四十五番、元金二分三朱市次郎、

十兵衛四ツ入り青梅拾羽織一枚、(ト讀上げ

る、傳右衛門帳面へ合判を押す) 千三百

四十六番、元金三分二朱百藏、千助純立綿

女小袖一枚、外に二百文入替拾利の貸なり

(トよろしく讀上げる、傳右衛門帳面へ合判

を押すことあつて、)

傳右 こりや／＼長松 合判を押した分は、藏

へ持つて行つて來い。

長松 へい／＼畏まりました。(ト件の入質を

持ち暖簾口へはひる。此の内音助流れの質物

を調べることあつて、)

音助 もし番頭さん、まだ此の質は八ヶ月だか

ら、流すには早うございます。

傳右 いや／＼八ヶ月なら流れの口ぢや、元

利を持つて請けに來ても、出して遣つてはな

らぬぞよ。

音助 何處の質屋でも、二ヶ月位は待つてやる

は當り前だ。

傳右 いや、そんな猶豫をしては質屋渡世は飯が喰へぬ、然しこんな番頭が家の身代を延してあげても、後家御さまは只の一度優しい詞を掛けてはくれず、剩さへ娘御を屋敷から下げて此のわしと妻さうとはなさらないで、舞穿鑿をさつしやるゆゑ、遂にはこんな騒動が起り、親類寄つて無駄評定、はてさて馬鹿げたことだわえ。

音助 そんならいよ、この質は、流れの口でござりますか。

傳右 わしが承知だ流してしまへ。(ト此の時奥より長松流と采配を持ち、和藤内の身振に出て来り、)

長松 南無三、質が流れた。(ト聲色を遣ふ)

傳右 え、喧しいわえ、何ぞといふと芝居の眞似をして、汝のやうな奴は、пей、役者にでもなつてしまへ。

長松 誰が пей、役者になるものか、おいらは市川團十郎の弟子になるのだ。

傳右 どうして、おのれなどが、團十郎の弟子になられるものだ、團右衛門の弟子が相應だ。

長松 誰があんなで、役者の、弟子なんぞ

になるものか。

音助 これ、長松どうしたものだ、番頭さんに利いた風な口答へをしては濟まないぞ。

長松 お袋さんの所へ這ひこんで、油を取られた恥かき番頭、何の構ふことがあるものか。

傳右 うぬ、とんだことをぬかしあがる。(ト立掛る、奥より以前の新之助おしげ出来り、)

しげ 若し番頭さん、お袋さまがお呼びなされます、ちよつとおいでなされませ。

傳右 お袋さまがお呼びなされずば、捨て置く奴ではなけれど主と病是非がない、此の餓鬼め記えて居ろ。(ト暖簾口へはひる。)

新之 これ長松どん、今奥で聞いて居たが、あんなことを口へ出して、お前が言つては濟まないよ。

長松 それでも本當のことだものを。

新之 假令實のことであるとも、お店を預かる番頭さんに狼なことがあつたといつては、お家の暖簾に拘るゆゑ、決してこれから言ひなさんな。

音助 お、こりや新之助のいふ通り、お袋さまの恥になるから、世間の人に喋るなよ。

しげ ほんにそれゆゑお袋さんが、御親類方へ

聞かせまいと奥でお案じなされますから、御用はなけれど番頭さんを、わたしが奥へやりましたわいな。(ト奥より以前の傳右衛門棕櫚幕を持ち出で、)

傳右 さあ長松、今の事をもう一言、この番頭に言つて見ろ。

長松 お、言はなくつてさ、彈かれ番頭の助平番頭、

傳右 うぬ、さうぬかせば、

ト外へ退出す長松を傳右衛門追廻す、此の内花道より河内山宗俊好みの道行振、眺への木刀をさし出来り、直に舞臺へ來り、傳右衛門を留めながら内へはひる。

や、誰かと思へば、

皆々 河内山さま。

宗俊 年端も行かぬ小僧を捉へ、大人げない番頭どの、いつたいこりやどうしたのだ。

長松 番頭さんが夜這にいつたのを、わしが知つて居りますから、

傳右 又そんな誑をつくか。

宗俊 さういふことなら河内山が、爰で調べを附けてやらうか。

傳右 いえ、決してそれには及びませぬ。

宗俊 及ばぬことなら番頭どの、まあ下に居るがよい。

ト無理に坐らせる、これにて長松は暖簾口へ逃げてはひる、新之助茶を汲んで出て、

新之 お茶をお上りなされませ。(ト宗俊茶碗を取つて、)

宗俊 同じ小僧でも、今のと違つて、此の子は大層おとなしいね。

しげ 新之助どのの學者の倅、育ちが違ひまするから、おとなしうござります。

傳右 して河内山さんには、何しにお出でなすつた。

宗俊 當家へ何しに參るものだ、質物を置きに參つたのだ。(ト合方きつぱりとなり、)

傳右 して、お置きなさる品物は。(ト是れにて宗俊差しとる木刀を出し、)

宗俊 これを取つて貰ひたい。(ト傳右衛門に渡す、取つて見てふめぬといふ思入あつて、)

傳右 刀劍類はふめぬ内にも、取分け是れは桑の木刀、目貫が無垢でもあることか、赤銅の二

疋獅子、ふめる所がござりませぬが、いくら貸せとおつしやります。

宗俊 たんともいらねえ、五十兩貸して下せ

え。

皆々 え。(トびつくりする。)

宗俊 着類と違つて刀劍は質屋ではふめぬものだが、假令桑の木刀でも、此の河内山の名前が附けば伽羅の木刀も同じこと、清く五十兩貸してくりやれ。

傳右 は、御酒機嫌か存じませぬが夜見世で買へば、五匁目か銀一兩で買へる木刀、御常談にも程がござります。

宗俊 これへ番頭何を申す、手前常談は決して言はぬ、斯う見えても紀州家から拜領した此の木刀、生涯流せぬ代物だから、五十兩貸してくりやれ。

傳右 何處から拜領なすつたかその所は存じませぬが、高の知れた其の木刀、質物にはふめませぬ。

新之 河内山さまが五十兩貸せとおつしやいますからは、あの目貫が後藤家の作彫ではござりませぬか。

晉助 いや、そんな物ではない、番頭さんの言ふ通り直をよくふんで一分か二分、三分と貸せぬ木刀だ。

宗俊 いや假令ふみは違ふとも、河内山の魂とも思つて居る此の木刀、五十や百の端た金

で、流しはせぬから貸してくりやれ。

傳右 何だといふと河内山だの宗俊だのとつしやいますが、お坊主衆のお仲間では貴いお名か存じませぬが、私共へござつては權兵衛八兵衛同様に、二人名前で質札へお名前の附く置主仲間、お顔づくでは貸されませぬ。

宗俊 それではどうでも貸せぬといふか。

傳右 お貸し申すことは出来ませぬ。(トきつぱりいふ、宗俊思入あつて、)

宗俊 さて、話せぬ番頭だ、後家御に逢つて頼まうから、女中奥へ案内をしてくれ。

しげ いえ、ちと取込みがござりまして、御親類のお方々がおいでなされてござりますすれば、

新之 宗俊さまのお頼みでも、奥へはお通し申されませぬ。

宗俊 そち達までが同じやうに、因業なことをいふか。いよいよ、河内山が自身に行つて、主

人の後家に談判せう。

しげ いえ、お通し申されませぬ。

宗俊 え、邪魔をせずと、退いて居る。(トきつとなる。此の時奥にて、)

まき そのおいでは及びませぬ、只今それへ參ります。(ト合方になり、奥より以前のお